

【水の作文大賞】

ここに水があれば

熊本県 真和中学校 三年 清永 卓樹

歩き疲れた。喉が乾いた。ここに水があればなあ。

僕が迷子になったのは、小学校に入ってからまもなくのことだった。友達と三人で歩いた田舎道。迷っているうちに日が暮れて、口数少なく早足で歩き回った。喉がひゅうひゅう鳴っていた。探され見つけられ、もらった水を飲んだら目頭が熱くなった。安全な場所で水を飲む。それがどんなにありがたいことなのか、あの日は知った。

世界の水事情を知ったのもその頃だった。両親がタンザニアに住む男の子の支援をしていたため、活動報告の冊子をよく見ていたのだ。毎日歩いて水をくむ子ども。しかも水は安全でなく、病気や死を招くこともある。そこに時間と体力を奪われる子どもたちは学校にも通えず、貧困から抜け出せない。当たり前のように水を使っていた僕は、胸を痛めた。そして、支援金が子どもたちの学費と村の環境を整えることに使われると知り、お小遣いの一部を渡すことにした。その村に水道が整備されたのは、それから五年後のことだった。あの子が蛇口をひねったら透明な水が滴り落ちて、安心してゴクゴク飲むことができる。大げさでなく、それは命の水だと思った。

あれから数年。今も世界で四人に一人は安全な飲み水を使えないという。五人に二人は安全に管理されたトイレが使えない。僕はマズローの欲求五段階説を思い浮かべた。これは、人間の欲求を五つの階層に分けたもので、生理的欲求、安全欲求、社会的欲求、承認欲求、自己実現欲求と名づけられている。それがピラミッド状になっていて、下位の欲求が満たされた後、上位の欲求へ行くというものだ。水に関する欲求は少なくとも初め二つ。ここが保障されなければ、人とながり豊かな社会をつくり、やがて自己実現へ向かうということができない。水なしに、人は安心して生きられないのだ。

そしてこの問題は決して遠い世界の問題でもない。なぜなら今、日本

も水道危機に直面しているからだ。日本の水道普及率は現在、九十八%を超えている。でも高度経済成長期に整備された施設が多く、老朽化が進んでいる。また、水道事業は職員数が少なく、しかも高齢化が進んでいる。近い将来、日本でも安全な水が手に入らなくなるかもしれない。怖くなり調べると、国が上下水道確保のため水道行政の機構改革を行ったこと、公共と民間が連携して水道関連の公共施設を管理・運用し始めていることがわかった。知らなかっただけで世の中は着実に動いていた。

僕はさらに自分の住む県について調べた。熊本では二年前、TSMCという半導体工場が建設されている。地下水を使うと知ってはいたものの、年間八百万トンという量に、枯渇するのではと不安になった。ただ、調べ進むとTSMCは水田に水を張り浸透させるかん養を行うとあつた。大学と連携して経済活動と環境保全を両立させる研究も始めていた。県の取り組みを調べると、同様にかん養で地下水を増やしていた。熊本の水田は通常の何倍も水を浸透させられる恵まれた水田だ。地下水を使った以上にかん養を行い、水の巡りのバランスを保つ。それを意識することで持続可能なものにできると感心した。水を使いすぎない努力。それは企業だけでなく、一人一人がしていくことだ。自分の家で、学校や職場で、出かけた先で、いつもすべきことだ。

一昨年、アメリカで開催された国連水会議では、世界的な水危機への対策が話し合われた。やはり水問題は世界の問題であり、個人の問題だ。世界の二倍、アフリカの五倍水を使うという日本。ここに水があればなあ。そう願う未来が来ないように、そう願う国を助けられるように、まずは自分から節水を心がけ、世界や日本の水の状況について調べ、主体的に行動していきたい。